

「高度成長期横丁」に関する研究
- 山梨県甲府市中央 1 丁目を対象として -

A Study on the "Kodoseichoki-Yokochō" Pub Alley Built During the High-Growth Period
-Focusing on Kofu, Yamanashi-

166149 田中雄大

The purpose of this study is to propound the new concept of the urban architectural style, 'Kodoseichoki-Yokochō (a pub alley built during the high-growth period).' In the center of Kofu city, there are 17 Yokochō, which are alleys along which more than one shop locate, and eight out of 17 were built by the citizens during the high-growth period. 'Kodoseichoki-Yokochō' is different from Yocochō originated from the black market, and 'Yatai-mura' in the formation factors related to historical backdrop and location, and spatial characteristics. The three factors related to era are an increase in the number of land owners with financial power, the integration of commercial centers by Anti-Prostitution Law and city beautiful movement in preparation for the 1964 Tokyo Olympics, and facing difficulty to make the city fireproof. The two factors related to location are that Yokochō has been made for a long time in Kofu and the location how far the distance to downtown is. The spatial characteristics are mainly being made of reinforced concrete or steel, and internalized street to which stores are closed.

第0章 研究の概要

0-1 研究の背景と目的

都市は、建築家や都市計画家などの明確な主体や、法定都市計画という明確な手段により形成されるという一面を持つ。それらは、計画段階で明確な意志があり、目的があり、完成像がある。他方で、都市は「無数の主体によって歴史の中で蓄積されたものとして現在に伝えられた、その場所における空間的関与の総体」という側面を持つ¹⁾。都市の大部分は、特定の計画に勝って、個人の活動によってつくりだされる。

藤森²⁾は、「群として都市景観を構成するだけの大量さをそなえた建築」を《都市・建築》とし、関東大震災以降に普遍化した、伝統的町家形式に独特な洋風ファサードを持つ都市住居形式である看板建築を提唱した。初田³⁾は、都市建築を「特定の歴史的・空間的文脈を背景に、ある時代、ある都市に似た形式をもって多数現れるビルディングタイプ」と定義して、戦災復興期に主要鉄道駅周辺に現れたヤミ市を都市建築と捉えた研究がなされている。

本研究は、既往研究が対象とした都市建築の後の時代、すなわち、経済の爆発的な成長、建築材料、技術の普及が起きた高度成長期を対象とする。高度成長期に市民による自発的な開発が流行したことにより山梨県甲府市中央1丁目に集積した横丁を対象にして、「高度成長期横丁」という商業形式の都市建築を提唱することを目的とする。ここでの都市建築は、初田による定義を借りる。具体的には、以下4点を明らかにする。

- (1) 「高度成長期横丁」が形成された時代性要因
- (2) 「高度成長期横丁」が形成された場所性要因
- (3) 「高度成長期横丁」の空間特性
- (4) 既存横丁概念との共通性と差異

0-2 研究の位置付け

横丁は、「表通りから横へ入った町筋。よこまち。」(広辞苑)と定義される。本研究では、横丁を、「大通りから横に入った幅員の狭い道で、沿道に店舗が立ち並ぶ道」と定義する。

横丁に類する概念の研究として、横丁、飲み屋街、通り抜け空間、屋台村に関する研究が行われている。横丁、飲み屋街、通り抜け空間に関する研究¹⁾の多くは、通路の空間形態や通路上への溢れ出しなど現況の空間や用途に着目している。対象の形成を詳細に記述している研究は、初田³⁾による研究のみである。特に既往研究の対象とする横丁、飲み屋街の多くは、ヤミ市由来である。屋台村に関する研究²⁾では、中心市街地活性化の取り組みとして、事業内容や参画主体の記述、評価が行われている。

これらを踏まえ、本研究は高度成長期に開発され集積した横丁を対象に、横丁の空間実態だけでなく、その形成要因として時代性と場所性を明らかにすることで、ヤミ市由来の横丁と屋台村という横丁に関する2つの既存概念に対して、「高度成長期横丁」という新しい都市建築の概念を提唱する。

0-3 研究の方法と枠組み (図 0-1)

本研究は以下の手順で行う。第一に、文献資料、地図資料、老舗テナントへのヒアリング調査から、甲府市中心部の横丁を概観し、「高度

```

graph TD
    Title[「高度成長期横丁」の抽出、実態把握] --> Ch1[研究対象地概要(1章)]
    Ch1 --> Ch2[「高度成長期横丁」の実態と周辺地区の概要(2章)]
    Ch2 --> Ch3[形成要因]
    Ch2 --> Ch4[空間特性]
    Ch3 --> Ch3_1[形成要因①時代性(3章)]
    Ch3 --> Ch3_2[形成要因②場所性(4章)]
    Ch4 --> Ch4_1[都市、建築、表層の空間特性(5章)]
    Ch3_1 --> Ch6[既存横丁概念との比較(6章)]
    Ch3_2 --> Ch6
    Ch4_1 --> Ch6
    Ch6 --> Ch7[「高度成長期横丁」の提唱(7章)]
  
```

「高度成長期横丁」の抽出、実態把握

研究対象地概要(1章)

「高度成長期横丁」の実態と周辺地区の概要(2章)

形成要因

形成要因①時代性(3章)

形成要因②場所性(4章)

空間特性

都市、建築、表層の空間特性(5章)

既存横丁概念との比較(6章)

「高度成長期横丁」の提唱(7章)

第1章 研究対象地概要
1-1 甲府市の都市史概要

1-2 甲府市の繁華街の歴史

1-3 甲府市中心部の横丁 (図 1-1, 図 1-2, 表 1-1)

近世から現代にかけて大きく西進した繁華街跡には、幅員が4m未満かつ2以上の店舗を沿

甲府市中心部の横丁は、その形成時期から、戦前期、戦後復興期、高度成長期、高度成長期



図 1-1 甲府市中心部の横丁写真



図 1-2 甲府市中心部の横丁の分布

表 1-1 甲府市中心部の横丁の基本情報

順丁名	店舗数 (2016)	店舗業種(2016)								延床 面積 (m ²)	床下 面積 (mm)	建物高さ (mm)	用途 建物内・外	アー ケード	構造 構造	形成年	改築年	改築前構造	店舗 業数	変容率 (%)	通風距離 (mm)			店舗業種(建設建物)					大家 数	構丁以前
		飲食	3F以下	4F以上	娯楽	風俗	日用品	住宅	その他												1階	2階	3階	飲食	3F以下	4F以上	風俗	その他		
1 オオノイースト	16	○	○					○		79	2700	外	×	RC	3	1949	1987*	木造倉庫												
2 浅草飲食店	27	○	○							61	1390-2420	内外混在	○	S	2	1945	1997**	木造バラック												
3 坂本地所雑貨	2	○							○	52	1840	外	×				-	-												
4 春日ビル-博覧	8	○			○	○				52	1800	内	-	RC	B1-5	1969	-	-												
5 広塚大通り	15	○	○	○	○					52	2350	内	-	S	B1-6															
6 関見通り	9	○	○							52	1500	内外混在	○	木造	2	1962	1987	東と同じ	27	29.6	1800	1500	1500	○	○					
7 オリオンビル通り	12	○	○							72	1570-1840	内外混在	○			1964	-	-	16	93.8			2040	2040	○	○				
8 たま通り	11	○	○							27	2440	内外混在	○	RC	2	1970	-	-	33	36.4					○	○				
9 ニュー都農機	9	○	○		○					51	2250	内	-	RC	3	1969	-	-	13	28.1					○	○	○	○		
10 新橋南	3	○								12	2570	内外混在	○	RC	2	1964	-	-												
11 中央ビル	8	○	○							20	3550	内	-	S	3	1988	-	-												
12 商業ビル	12	○	○							26	1725	内	-	S	B1-2	1964	-	-												
13 商業ビル向かい側	2	○								15	1720	内	-	RC	2	1964	-	-	6	33.3					○	○				
14 柳小路飲食店	3	○						○		74	1500-2170	外	×			1903	-	-												
15 神見登道店	4	○			○	○				111	2400-2730	外	×	S	3	1924	1963	木造バラック												
16 村松新道	5	○								181	2280	外	×			1928	-	-												
17 甲府ぐもれ構丁	17	○	○					○	博覧	53	2800	内	-	S	5	1966	2013**	S造	28	60.7			2300		○	○	○			

後の4つの類型に分類することができ、高度成長期に形成された横丁が約半数を占める。それらは、従前は同所に横丁、路地等の道は存在せず、地主により商業目的で建設された飲食店、飲み屋、スナックなどが並ぶ横丁である。

1-4 研究対象の設定 (図1-3)

既往研究を整理すると、現在一般的な横丁の概念は、①戦前に形成された横丁、②戦災復興期のヤミ市由来の横丁、③中心市街地活性化の取り組みとして2001年以降に出現する屋台村の3つである。

甲府市の高度成長期に形成された横丁は、既存の3つの横丁とは似た形式であるものの、それらとは違う論理で形成された横丁であると仮説を立てることができ、本研究において、「高度成長期横丁」と名付ける。この形式は、戦後を代表するマーケット形式とその後の建築防災街区造成事業、再開発制度などの諸制度による商業建築形式との中間に一時的に立ち現れた高度成長期の商業建築形式として定立させようと考えられる。

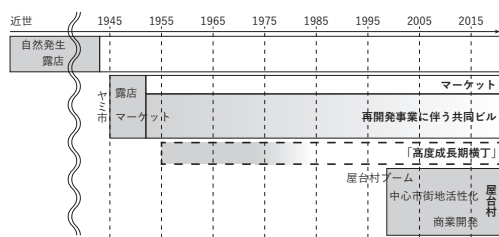


図1-3 横丁概念の整理図

第2章 「高度成長期横丁」の実態と周辺地区変容

2-1 「高度成長期横丁」の実態 (表1-1)

「高度成長期横丁」は、建設当時、主に飲食店、スナック、バーが入居し、場所によっては少数ではあるがキャバレーやクラブが入居した飲み屋街として形成された。「高度成長期横丁」は、ビルに内包されるものがあり、横丁が複数階に渡る場合がある。現在、ほとんどの横丁で店舗充填率が50%を下回り、空洞化している。

2-2 中央1丁目の地区変容

「高度成長期横丁」が集積する中央1丁目は、飲食店、キャバクラ、スナック、クラブ、性風俗店等が集積する甲府中心部の一大歓楽街である。しかし、高度成長期より前は、戦後の復興が周辺地区に比べ出遅れたため、商業的価値が低い地域であった。しかし、高度成長期になると、この地区に多くの横丁が形成され、一大歓楽街となった。

第3章 「高度成長期横丁」形成の時代性要因

3-1 甲府市の小売業の変遷

高度成長期は、第二次世界大戦中の物価統制以来衰退した商業が、戦後の物価統制の撤廃と好景気により勃興した時代である。個人の所得と消費支出の増加により、小売、飲食店店舗数が増加し、商業主が資本力を持った。飲食店業態に関しては、1964年の夏季オリンピック前後にスナックという業態が生まれている。

3-2 甲府市の戦災復興都市計画：広路一号線事業 (図3-1)

甲府空襲により焦土と化した甲府の戦災復興都市計画街路である駅前目抜き通りの広路一号線(現、平和通り)事業、本道を中心とした都市美化運動が、甲府の売春規制と露店規制に大きな影響を与えた。

3-2-1 戦災復興都市計画街路事業と風俗規制

甲府市中心部穴切地区に明治時代より存在する遊郭が戦後は赤線地帯となった。赤線の範囲を超えて違法の風俗営業が広がっていた。

広路一号線事業に伴い、穴切の赤線地帯外側に移転された露店街が特殊飲食店街を形成したことで、行政の売春規制に関する条例の議論が始まった。1958年には、売春防止法が施行され、赤線は廃止され、売春は特定地域から市街地全般に広がった。当時の繁華街である中央地区は、デパートの駅前への移転等による繁華街の西進を受けて、夜の街としての色を強めた。そしてトルコプロの建設が集中し、市内唯一のトルコプロ指定地区に選定されるように、売春の受け皿となった。

3-2-2 都市美化に伴う露店整理

甲府市には戦後露店が多く存在し、1976年9月まで徐々に数を減らしながら、露店営業が許可された平和通りに存続した。露店は、治安、衛生、美化の点において、徐々に規制されていくが、特に1964年夏季オリンピックに向けた平和通りの美化が本格化し、露店は厳しく規制された。「高度成長期横丁」の一部に、露店商が出店している。

3-3 都市不燃化 (図3-1)

甲府の復興は市民によって速やかに行われたが、その大部分は木造家屋が密集する火災の危険がある地域であった。1957年の準防火地域指定以降、行政、市民ともに不燃化の運動が活発であったが、防火地域指定が実現しなかったことで建築防災街区造成事業は不成立に終わり、仮店舗の用地問題により共同不燃化ビルはわずか2つしか実現せず、民間での商業開発の余地が残った。

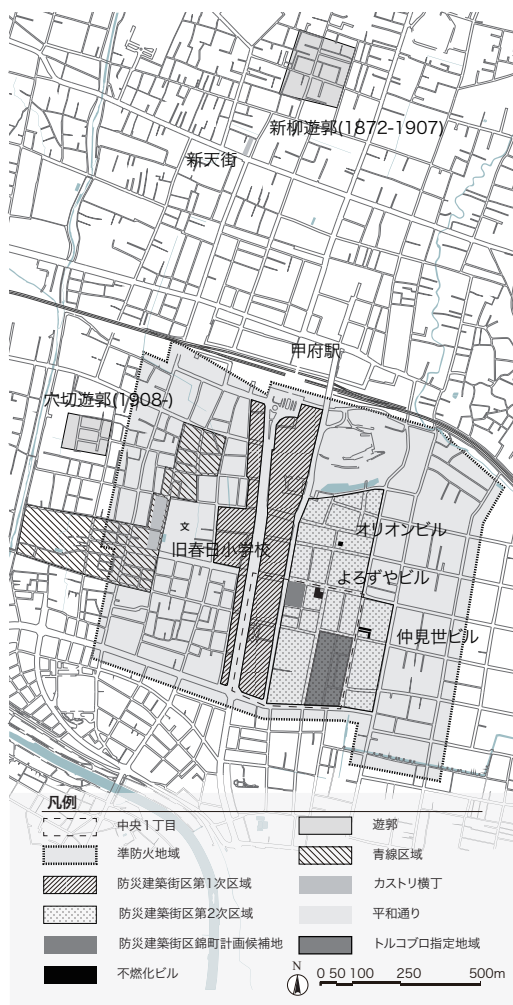


図 3-1 土地分筆変遷図

3-4 小括 (図 3-2)

「高度成長期横丁」形成の時代的要因として、以下3点が明らかになった。①商業の勃興により一地主が資本力を持ち一事業主になり得たこと。②売春規制による赤線の廃止と東京オリンピックに向けた都市美化による露店の廃止が歓楽街の統一と商業の集積を起こしたこと。③都市不燃化の難航による民間開発の余地が残されたこと。

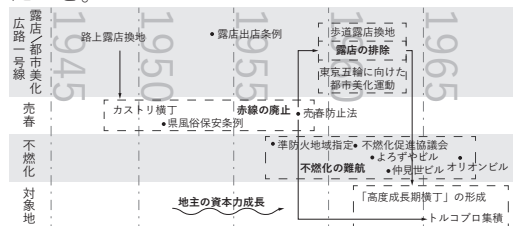


図 3-2 戦後復興期から高度成長期にかけての甲府市の動向

第4章 「高度成長期横丁」形成の場所性要因

4-1 地区の概況と横丁の実態

戦前、戦後、高度成長期のいずれの時代も、対象地区には街区内路地があり、多くは横丁であった。横丁開発は、対象地区の地域文脈であった。特に、戦前と高度成長期の対象地区は、繁華街の周辺部に位置しており、裏春日通りと繁華街を結ぶ方向に横丁が形成された。横丁は、繁華街から周辺地区に動線や賑わいを引き込む役割をしていたことが推察できる。



図 4-1 土地分筆変遷図

4-2 土地所有構造の変遷（図 4-1）

城下町時代の対象地区は武家地であり、現在の裏春日通りは存在せず、街区の背割り線であった。裏春日通りは明治時代以降に道路になる。すなわち、周辺街区と比較すると、街区の短辺方向長さが短く、表通りと表通りを結ぶ路地が入りやすい素地があった。

戦前期は、一地主が土地に私道を通すことで横丁を形成している。他方で、高度成長期は、複数の地権者が共同して横丁を形成している。

第5章 「高度成長期横丁」の空間特性

「高度成長期横丁」は、8つのうち7つが表通り同士をつなぐ横丁であり、初期の「高度成長期横丁」は単独地主による開発であるが、後期には隣接する敷地の複数の地主により共同で開発された。

法規的な規定により、「高度成長期横丁」の多くは、通路が建物の内部空間であり、外部空間の通路もアーケード屋根により内部化されている（「内部通路」と呼ぶ）特徴がある（図 5-1）。内部通路に対する沿道店舗室の開口は、基本的に扉のみであり、窓が開いていることは稀であり、閉鎖的である。準防火地域の建築制限を受けて、「高度成長期横丁」のほとんどが非木造の耐火構造を採用している。

横丁の通路上には椅子や机はなく、店舗との一体的な利用はなされない。店舗ごとの看板と外壁の外装、扉のデザインが通路の景観を特徴づけている（図 5-2）。

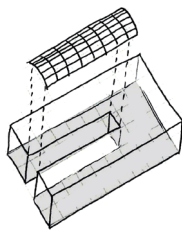


図 5-1 内部通路



図 5-2 内部通路の表層

表 6-1 既存横丁概念の比較

	ヤミ市を起源とする横丁			高度成長期横丁	屋台村
	マーケット		再開発ビル		
	一体開発型	戸建て型			
年代	1945-1950		1961-	1962-1970	2001-
社会背景	流通制度の崩壊		防災、市街地改造、高度利用	経済成長、小売業の向上	中心市街地の衰退
開発主体	テキ屋組織など地元有力者	テキ屋組織など地元有力者、または土地所有	組合	土地所有者	民間会社、第3セクター、協同組合
開発主体関与	土地、建物	土地	土地、建物	土地、建物	土地、建物
場所	駅前建物疎開空地、周辺換地（集団移転による）			繁華街	駅周辺繁華街
用途	小売店から徐々に飲食街化		飲食街	飲み屋、飲食店	飲食店、飲み屋
構造	主に木造		RC造、S造	主にRC造、S造	様々
間口（m）	2.1	-	-	2.4-6.0	3
奥行き（m）	2.7	-	-	3.4-5.6	3.3
面積（㎡）	5.67	-	-	6.6-21	9.9
通路幅	（900-）、2700		-	1570-2800	1600-2800

第6章 既存横丁概念との比較

前章までに明らかにした「高度成長期横丁」に加え、既往研究を用いて、ヤミ市由来の横丁、屋台村の特性を整理した（表 6-1）。

ヤミ市由来の横丁と「高度成長期横丁」は時代が近接しているが、屋台村は他の二つの概念に比べて新しい。中心市街地の衰退という社会背景に対して、民間企業だけでなく、商工会議所や行政など参画主体の公共性や事業の公共性という点が他2つとは大きく異なる。

ヤミ市由来の横丁のうちマーケットの形式は、「高度成長期横丁」でも見られ、特に一体開発型は近似している。「高度成長期横丁」の広瀬大通り、オリンピック通りの一部は長屋を採用しており、オリンピック通りの長屋の店舗面積は一体開発型のそれと類似している。他方で、建築構造に相違がある。マーケットは、戦後の物資の不足する時代の建築であるため、木造が一般的であるが、「高度成長期横丁」は非木造である。例外として、最初期の「高度成長期横丁」である広瀬大通りは木造の長屋であり、マーケットとの連続性があったと推測できる。

ヤミ市由来の横丁と「高度成長期横丁」の差異は開発主体である。前者は、基本的にテキ屋組織などの地元の有力者が不法占拠のかたちで形成していて、地主は関与しない。一方で、後者は、地主が開発を行った。地主の多くは従前から土地を所有し、生業をやめ横丁を形成した。このような地主による上物の開発は、ヤミ市の戸建て型でも見られるが、この型は少数である。これは、戦災復興期の地主に対して、高度成長期の地主は開発を行うことができる財力を有したという時代性の違いであると考察される。

マーケットの業種は、終戦後すぐは小売店が多く、正規の商業の復興に対して差別化を図るように徐々に飲食街と化した点においても、初めから飲食店や飲み屋を想定している「高度成長期横丁」とは異なる。一方で再開発ビルは、「高度成長期横丁」と同じ時代にできたもので、飲み屋街という業種や、建物内に横丁を形成する

という点で共通する。しかし、両者は形成論理が異なる。再開発ビルが、既存マーケットの収容や露店の収容、既存横丁空間の建物化を行っているのに対して、「高度成長期横丁」は、形成以前に同所に路地や横丁は存在していなく、収容する既存商店も存在しない新規の横丁開発である。

ヤミ市由来の横丁と「高度成長期横丁」は、通路の空間特性も異なる。ヤミ市由来の横丁(対象は、ハーモニカ横丁、思い出横丁、東小路)は、扉以外に開口を持つ開放型ファサードが多く、店舗と通路の一体的な利用や溢れ出しが多く確認される⁶⁾が、「高度成長期横丁」は、閉鎖型ファサードが多い(図6-1)。

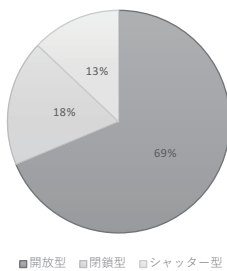


図6-1 ヤミ市由来の横丁の建物ファサードの種類

第7章 結論

7-1 「高度成長期横丁」の提唱

「高度成長期横丁」とは、高度成長期に、地主によって開発された、幅員4m未満の内部通路を設けて小規模店舗室を沿道に並べる商業建築形式である。内部通路の店舗ファサードは閉鎖的なしつらえである。主に、非木造(鉄筋コンクリート造、鉄骨造)である。従前に同所には横丁や路地は存在せず、高度成長期に突如形成された横丁である。

■時代性——高度成長期に、個人の所得、消費支出は大きく伸長した。商業の発展、建築技術の普及を背景に、一地主が一事業主として都市の改変を行うことが可能になった時代の訪れであった。また、高度成長期の全国的な動きとして、売春防止法の制定、東京オリンピックに向けた都市美化運動、都市不燃化の3つがある。前者2つは、かつて存在した赤線地帯、露店という歓楽街を都市から排除し、赤線、露店とは性質を別にしていただろう商業繁華街が、一手にそれらの機能を引き受け、商業投資が集積することになった。高度成長期は、建築の不燃化による大規模な商業空間の創出が始まり、また、既存商店街の共同不燃化が起こり、商業近代化が進んだ時代でもある。甲府市では、行政が防火地域指定に奮闘したものの最終的には叶わず、市民による開発の余地が残された。

■場所性——甲府市では、戦前より横丁による商業地の開発、横丁文化が地域文脈として継承

されてきた。特に武家地由来の通りから通りまで一筆の敷地が多く残り、繁華街の周辺を繁華街とつなぐ手法であった。

7-2 「高度成長期横丁」の評価

・敷地を超えた都市空間の形成

「高度成長期横丁」は、敷地を超えることで、通り同士をつなぐ横丁を実現し、都市の回遊性を高めている。現在、開発の多くは単一敷地の中で完結して行われるが、都市的な視野を持って、街区、都市スケールで計画を行う姿勢が重要であろう。

・通りの賑わいを伝播する線としての横丁

通り同士が横丁によりつながることで、互いに影響を及ぼして、通りの性質が変化する効果を地区開発で活かしていくことは可能であろう。横丁は、単なる商業施設の「点」でなく、ある場所と他の場所を結ぶ「線」であり、エリアの価値を考える重要な手法となり得る。

7-3 研究の課題

甲府市以外の都市においても、「高度成長期横丁」と類似の建築が確認され、全国的な都市建築の可能性はあるが、調査を行っていない。

【補注】

- (1) 参考文献4) など
- (2) 参考文献5) など

【参考文献】

- 1) 東京大学都市デザイン研究室 編(2015),『図説 都市空間の構想力』, 学芸出版社
- 2) 藤森昭信:看板建築の概念について(近代日本都市・建築史の研究 1-1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 第50巻, pp. 1573-1574, 1975
- 3) 橋本健二、初田香成(2016),『盛り場はヤミ市から生まれた・増補版』, 青弓社
- 4) アルマザン・ホルヘ、岡崎瑠美:飲み屋横丁における形態学的研究 -東京ミクロ都市空間に関する考察-, 日本建築学会計画系論文集第78巻, 第689号, pp. 1515-1512, 2013
- 5) 倉原宗孝:まちなか活性化・まちづくりに向けた市民主体による事業への取り組みに関する研究 -帯広市「北の屋台」を通じて-, 日本建築学会技術報告書第16号, pp. 303-308, 2002
- 6) 計良宗一郎、末繁雄一、平本一雄:ヤミ市を起源とする飲食店街の空間特性比較:商業市街地の魅力特性研究 その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集 2015, pp. 583-584, 2015-09
- 7) 甲府市(1964),『甲府市史:市制施行以後』, 甲府市史刊行委員会
- 8) 甲府市史編さん委員会(1990),『甲府市史 通史編 第3巻 近代』, 甲府市役所
- 9) 甲府市史編さん委員会(1993),『甲府市史 別編Ⅲ 甲府の歴史』, 甲府市役所
- 10) 甲府市史編さん委員会(1993),『甲府市史別冊 甲府市の統計』, 甲府市役所